

思想とその基盤

メキシコ中央高原文化について

高 橋 堯 昭

メキシコ市の東北約五十軒の所に、アステカ人をして太陽と月の生れた所と信ぜしめた荘大なピラミッドの一群がある。

伝説によると、未だ太陽も月もなかった時代、ナナワツインとテクシステカトルという二人の神が、苦行の為ピラミッドから火の中に自らを投じ、太陽と月に再生した。そして出来た太陽や月の神も力を失ってくると、この聖火の中で焼かれ、その炎の中から新たな太陽と月としてよみがえった。という遺跡の町、テオティアカン（神になる町）の町を、私は幸いにも訪ずれる機会に恵まれた。

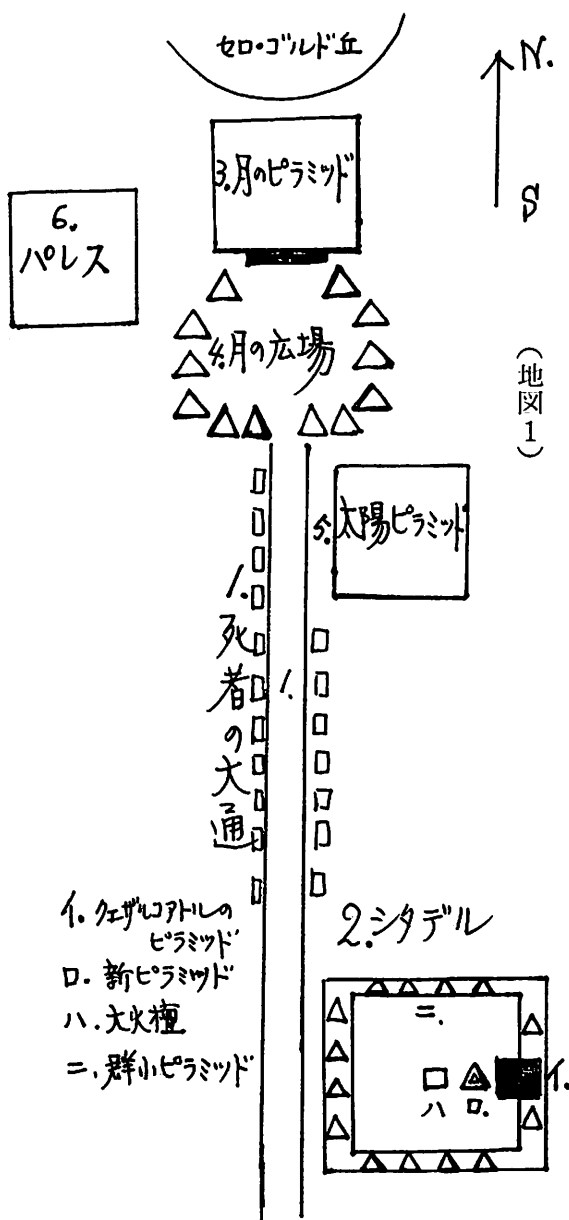
この町は西紀前三〇〇年頃にはじまり、西紀後七五〇年頃までつづいた。その最盛期は西紀二〇〇年から五五〇年であって、この時期に後述の月のピラミッドやクエツアルコアトルの神殿などの豪華な建物が建てられ、又太陽のピラミッドも大増築された。

そもそも、メキシコ文化の中一方の雄、東のユカタン半島のマヤ文化と並んで、この中央高原では、このテオティア

カンからトゥーラへ、そしてアステカへと文化が発展して行った。更に、ここの文化は東海岸のトルナックスへ、又マヤ文化圏のガテマラのカミナルジュへひきつがれて行った。

然し私はここでメキシコの歴史を述べるつもりはないし、且つ又その余裕もない。

唯、私のここで問題としたいのは、このような荘大なピラミッド群を中心とした宗教都市、そこに発達した宗教や文化の性格が如何なるものだったか、且つ、その文化のよって来る基盤は何であったかを、テオティアカンとその次



のトゥーラの文化との比較に於て問題としてみたい。



テオティアカンの町は海拔千八百米以上の高原に、約二〇・五平方料の広さに作られた。町の主軸は、「死者の大通」(地図1、) (後代のアステカ人はこの沢山のピラミッドや建物を墳墓と思い、死者の大通りと名付けてからそうよばれるようになった。)で、巾五五米、長さ約三キロにわたるメインストリート。南端のシタデル(地図2)と呼ばれる広場から北へ、月のピラミッド(地図3)の前の「月の広場」に向っている。この大通りの東に太陽のピラミッド(地図5)が接している。又この大通りの両側にはいろいろの建物があった。

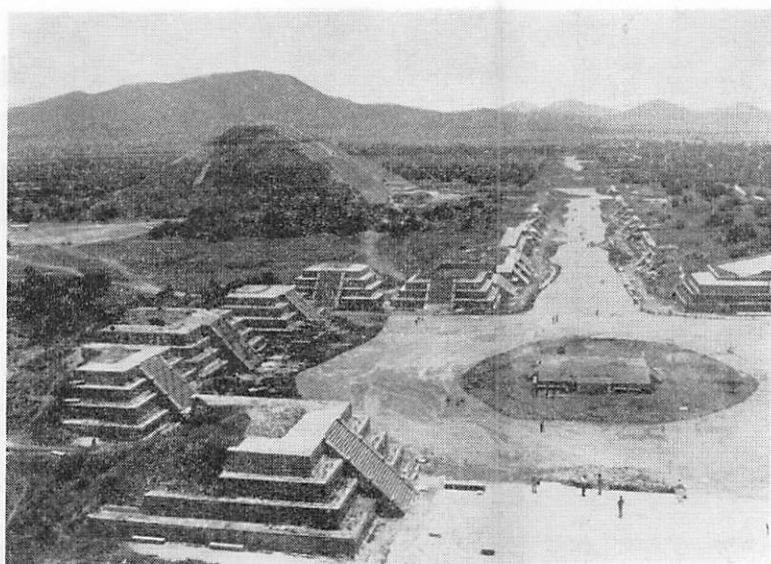
これらの建物は後述のように、いろいろの農業に關係のある神々を祀った神殿であった。

これらは後に詳述するように、残された壁画から読みとられるからである。

太陽のピラミッドはアメリカ古代最高最大の建物(写真A)で、高さ六十八米、基盤は二二四平方米、エジプトのギゼーのピラミッドと底面積は大体同じという壮大さ。日乾しレンガを積み重ね、その上にテソントレという赤みがかった火山岩の石片でおおっている。

この上に神殿が立っていた。月のピラミッドもそうだが、太陽とか月とか夫々名付けられてはいるが、これらは後代のアステカ人がとねた神話の上から名付けられたもので、考古学的には本来、雨の神や水の神殿がこの上に立っていたと考えられる。故に厳密には名前と本質は異っていることが注意されるべきである。

次に、月のピラミッドの方は太陽のそれよりやや小さく、高さ四十二米、底辺一五〇m×一二〇mだが、地盤が月の方が高いから大体同じ高さとなっている。共に現在は五段状のピラミッドであるが、もとは四段のもので、復元に



(写真A) 月のピラミッド頂上より太陽のピラミッドをみる。前の広場が月の広場、広場の中央の壇が火をたく壇。大通が死者の大通

あたった学者が間違ったといわれている。

この段状の建築様式がマヤ文化の段のない三角錐のピラミッドに対して、テオティアカン系のメキシコ中央文化の建築の特徴となっている。

この月の広場の東側にパレス（地図6）といわれる神官王の住居群があった。即ちケツアルパロトルのパレス。これは柱が蝶、或はケサル鳥の模様が彫られた宮殿。或はジャガーのパレス、即ち羽根のあるジャガーの絵のある宮殿。又羽根のあるホラ貝（写真B）が柱に彫られた宮殿等お互いに隣り合っている。

これらの部屋は神官王や貴族達が住んだ所である。

さて南端の「シタデル」（地図の1の2）は一万平方メートルの長方形の広場に名付けられた名前で、「城塞」というその名にも拘らず、それは宗教的な儀式用であって、軍事的なものではなかった。このことはあとで詳述しよう。

シタデルの中央ピラミッド（地図2のイ）は六段状



(写真 B)

の段で出来ている。これはクエザル
コアトル (Quetzalcoatl) の神殿
といわれている。

そしてこれを神官達の住居と思わ
れる建物の土台が囲んでいる。(こ
れらは最古の建物といわれている。)
クエザルコアトルの神殿のピラミ
ッドの前に、新たな四段のピラミッ
ド(地図2のロ)が建てられ、せつ
かくの重要な建物の景観をそこなっ
ているのが、如何にも残念である。

造りの十米四方位の大火壇(地図1の2のハ)が作られている。これが火をたく壇で、神の再生を祈り、或は神官王
や為政者に限られたのであろうが、死体をここで焼いた。それは火によって魂の再生が信ぜられたからである。そし
てこの新しい火が点火されると、同時に月のピラミッドの後の山セロ・ゴルドの丘の頂の神殿に火がともされ、人々
に新たな時代の到来を告げた。要するに、魂の不死を信じた当時の人達は前王が死んでも、魂は新王にうつがれて
新しい時代が来たことを認識したのである。

矩形のシタデルの広場をグルリと囲むまわりの一辺約百米の壇の上には、各辺に四つづつの小さなピラミッド（地図1の2のニ）が点在する。但し正面だけは中央にクエザルコアトルの神殿ピラミッド（地図1の2のイ）があり、両側に小さなピラミッドが一つづつあるから、ここは都合三つ、全部で十五のピラミッドが作られている。

これらの上には、夫々木造の神殿が作られ、そこにいろいろの神々が祀られたと想像される。又これらの小ピラミットに囲まれた広場はオープンエヤー（野外的）な祭礼式典に使われた。

又町の主軸たる死者の大通りから離れるに従って、庶民の住宅が続く。かくて約六万人とも八万五千人ともいわれた大都市が、この高原に約千年にわたって栄えたのである。



さて遺跡の彫刻、絵画の特徴を考えたいが、まず第一に、ここの壁や柱に表わされたものが、彼等と関係のない空想のものか、或は当時の現実の一つの表現であるかによって、この出土品の取扱い方の価値が変わって来る。故に、これについて一例をあげて考えよう。

即ち、テオティエアカンの神殿の一つの壁を飾る美しい壁画「水と雨の神トラロックとそれを取りまいてゐる数人の人物」の後景に淡青色の線でふちどられた緑の細長い区劃のある場面がある。この緑の区劃と淡青色の線とが厳格な秩序をもって次々と並んでいる。然も、その多くの区劃の中に、今までメキシコの農民の重要な食物、トウモロコシインゲン豆、カボチャ、マゲイ等々の絵が描がかれている（写真Cの人物の頭部の後ろに豆がえがかれている。）

これは現代のメキシコ市の郊外ソチミルコ湖の周辺で行なわれているような「チナムパ」であるともメキシコの考古学者エドワルド・マトス・モンテスマは断定した。



(写真 C)

そうでなくとも日に焼けた中央メキシコの乾燥地帯では、その肥沃な土質にも拘らず、水の人為的補給がなかったら、とうてい八万五千人ともいう大人口を養うことは出来ない。

炎暑のため、ひび割れした土地、シャボテンやリュウゼツランまでも枯れる所では、特にテオティアカンのような大人口を養うには、何かしら乾燥する自然への対抗策がなければ生きては行けない。これ故に、彼等は非常に古くから、集約農業のシステム「チナムパ」を生み出したようである。

チナムパとは川や湖の岸辺で、突出した場所或は現在でいう干拓した土地の、三方を水でとりかこまれた在でいう干拓した土地の、三方を水でとりかこまれた長くて巾のせまい土地のことである。彼等はこの上に、水草を幾重にも積み上げ、運河の底からくみあげた泥土をのせる。水草には定期的に水をかけ、くさらせて腐蝕土とする。この人工の島の斜面に柳等を植えて、淵の破壊を防ぐ。現在分っているチナムパの最大のは長さ九十米、巾四乃至九米の細長い土地で、このチナムパによる年数回の収獲が現代でもメキシコを大いに潤おしているのである。

これを学的に探究した考古学者は、周囲の沙漠に対して植物の青々と茂げり旱魃にも水の出る土地を堀り下げたと

ころ、地表から四十センチの所で多量の水分を含んだ層を見つけた。この層は一米四十五までの厚さがあり、おまけにこの層からテオテアカンの古い陶器がみつかった。それによって、当時チナムバがすでに作られていたことが判り、そして、為に壁画に表わされたものと考えられるに至った。即ち我々の常識では考えられぬコッケイな稚氣愛すべき神像や、分けの分らない彫刻や絵画が、実は当時の社会状態や宗教思想を示すものと注目されるに至った。

それ故に、私はこの壁画を手がかりとして問題を進めて行こうと思う。

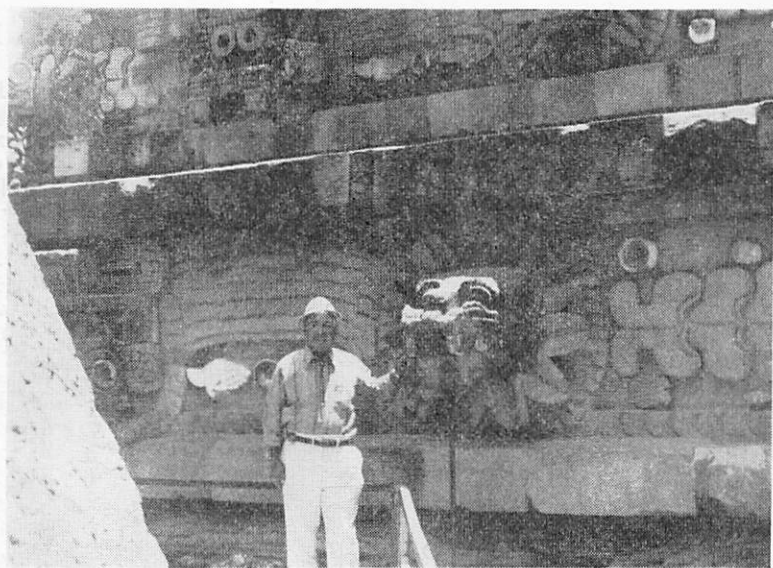


(一) 一番特徴的なものはシタデルの中央ピラミッド、即ちクエツアルコアトルの神殿ピラミッドの壁画に残されたグロテスクな顔をもった雨の神の像である。(写真D) これは円形の大きな目と四角な大きい口をもった神像と言うにはほど遠い、稚氣愛すべき神の像である。(筆者の頭の上方の円い目の像)

更に又、そこにはクエツアルコアトルという鳥の羽根によって飾られている、東洋の竜を連想させる蚊の頭の神像(筆者が立っている横のもの)が随所にみられる。

これらの像は交互的に彫られているが、そのまわりには貝や波等水を表わすものでうめられていて、両者と水との関係を暗示している。又、この交互的に彫られた二つの像が、もしピラミッド全体が完全であるなら三六六の蛇の頭と同数の雨の神の顔とがあつた筈である。これはこのピラミッドが恰も石の暦として、一年が三六六日の周期で巡環することを示していたと考えられるからである。私は二千年も前に一年を三六六日として計算した当時の文化の高さは大いに注目されていいと思う。

又この神殿のピラミッドの壁には、水の流れはもとより、海の貝や亀等、水に関係深いものが彫られているのは、

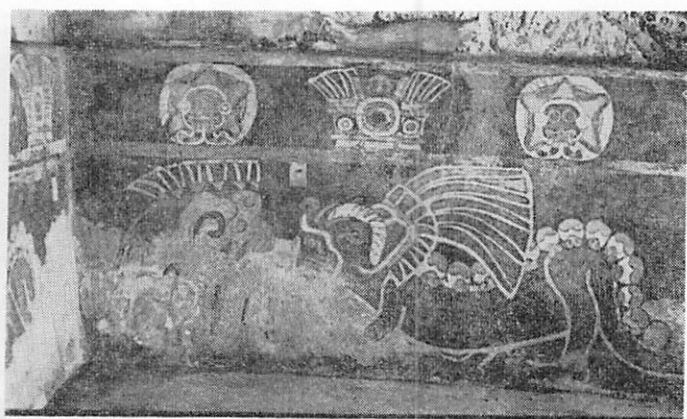


(写真 D)

如何に水を欲したかが想像されよう。その一例として、雨の神トラロックの大きい目は目から涙が出る。然も、涙のしずくからは雨の水滴を連想させる。だから人々は沢山の雨の水滴をと、雨の神の目なるべく大きく彫ったのであらう。

(二) 現在人類学博物館の入口にある大きな石像は、月のピラミッドの根本から発見された像であり、巨大な一枚石で、それは三・三米の高さと二二トンもある。巨大な印象を与えるこの像は、雨の神トラロックの妻 (Chalchihlicue) の名で後代アステカで言われた神であって、これが月のピラミッドの上にあったと推定される。故に雨の神とピラミッドの關係が想像されよう。

(三) パレスの壁画に羽根の頭かざりをかぶったジャガーが、これも又羽根のついたホラ貝の水筒の水をのんで居る。ジャガーの背中には小さなキノコ状の沢山の植物が生えている。(写真D) これは水と植物の繁茂との關係を示すもので、即ちジャガーは植物の成長力を示して



(写真 E)

いたと考えられる。

(四) テオティエカンの *Aterelco* といわれる地区から出土した壁画は二段になり、下部はジャガーの絵からなり、上部は豊かに着飾った人々、その頭部はやはり大きな羽毛の帽子をつけている。これはジャガーの神と豊かさの関係を示していると考えられる。

(四) 更に *Tetilla* に於ける壁画に、赤・グリーン・ブルー・黄黒の多色でジャガーを、或は人々もジャガーのマスクをつけ社にぬかずきガラガラ鈴を振りならしている絵がある。これは後代のアステカでもそうであったように雨乞いの儀式である。それ故に、ジャガーの生長力とその根本の雨との関係が伺ひ知られよう。

(四) 鷺の壁画 (写真 F) これは鷺の羽根や体の下から大きな水滴が落ちてゐる。明らかに大空を高く飛ぶ鷺も雨をもたらす神として表わされた。

(四) 同じような雨乞いの意図の絵は *Tepantitla* という地区で発見された壁画で、大きな掬えの間の壁に神官の行進が示されている (写真 C の人物の前を参証) は、咒文を示し、且つ又一方の手に種や玉をまき散らしているから明らかに豊稔の儀式を表わすのであろう。

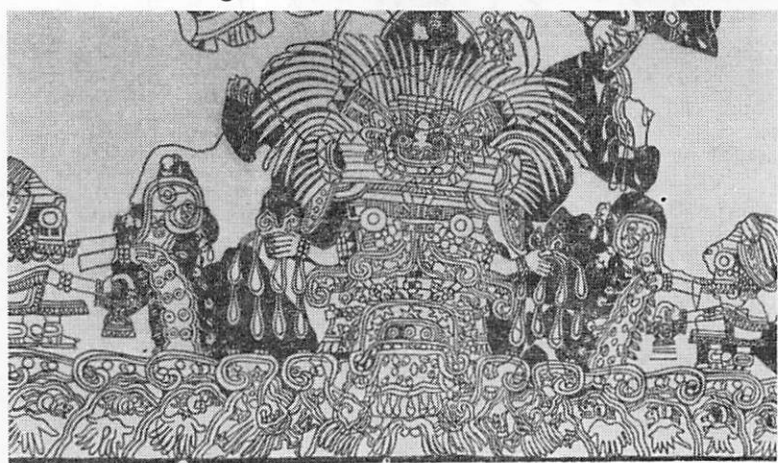
(ハ) 同じく Tepantitla の部屋の壁には、雨の神トラロックの画が描かれている。(写真G)

彼はヒトデや亀や貝に満たされた海の波の上に立ち、貝で飾られた両手は広くひろげられ、その手からは水の「しずく」が落ちてゐる。



(写真F→)

(写真G↓)



そして彼の顔は大きく広がった羽根をもつ鳥の幻想的なお面をつけている。これは雨の神トラロックを示すことは勿論である。

この神の両側には神官が花束や宝石のお供えをし且つ口から出ている？状の形で分るように咒文をとなえている。神の頭飾りの鳥はメキシコインデアンで導かれてた、長いみどりの毛をもったクエザルコアトルである。

注目すべき問題は、ヒトデや貝、そして亀が海拔一八〇〇米以上の高原の、然も海岸から遠い位置にあるこの壁に描かれていることである。クエザルコアトルの羽毛は熱帯のもので、当地のものではない。この乾燥の気候やマバラな植物の高原で、彼等はきっと海へのノスタルジャと十分な水へのあこがれを持ち、熱帯の豊かな植物の繁茂への願望がこれらにこめられているといえないだろうか。

(4) その他、この地の文化としてあげられるのは陶器のようなやきものである。

特に、フタつきで三本足のツボで、形は円錐形、色は朱色。これらはガテマラやマヤの地域にまでひろがり、この文化の流布を示すのに重要な歴史的意義をもつものであるが、特に問題となるのは、その表面に描かれたモチーフである。これらの絵は日常生活のもの、即ち吹き矢をもって狩りをする姿が描かれたものも多いが、中でも一番多いのは雨の神トラロックのマスク(写真)や蝶、ハイオグラフィー(クサビ形文字)等である。

又テオティアカンの前哨地か植民地であったと思われる Tlaxcala 州の Calpulalpan で出土したコップには内底に雨の神トラロックのマスクと側面に神官の行列が描かれ、神と神官との関係、そして神官の社会的地位、即ち生活の根本たる雨の神と、それを司どる神官との関係を暗示しているといえよう。

(4) さて、私はここに重要な壁画を紹介しよう。それはピラミッド西北方に少しはなれた神官の住居とも考えられ

(写真H)



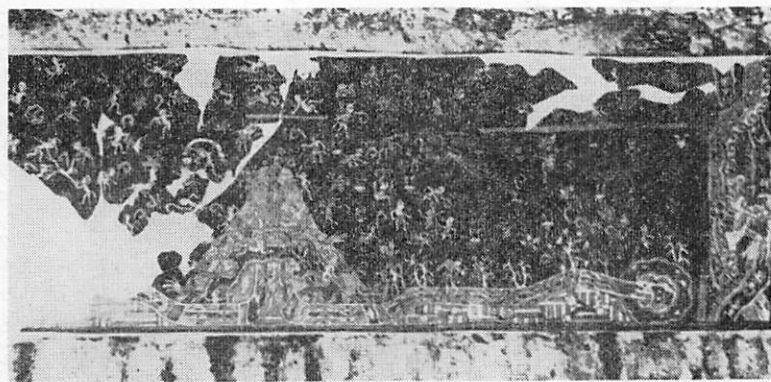
る所の壁画である。

(写真1)

絵には中央に高い山があり、そこから二つの川が流れてでている。

この川の堤にはト
ーモロコシ・カカオ
・花・果実の木が生え
中に一人の人物がト
ーモロコシや木の実
を収穫している。

この川の上流には沢山の小さな人物が泳いでいる。或は歌いながら、或は頭からもぐったり、或は背およぎしたり、或るものは川の堤で着物をかわかしている。或は木の下で休んだり、又共に手をくんでダンスしたり、或はボールや蝶を追ったり、或るものは収穫の木をもって踊ったりしている。或は宝石をまき散しているものもある。



(写真 1)

これは即ち、雨の神のパラダイス、祝福された園を示している。そしてその素晴らしい色合いの絵は喜びと活力の息吹きを表現している。自由な生き生きとした空間や、水の中の喜々とした人物は古代の神官王の厳格さに比して、庶民的な生き生きとしたコントラストを示している。

これらは、この強大な雨の神の恵みの下、豊かさを示すと共に、各人の口から例によって？状の絵がかかっているのは自由な発言、たのしい歌声を示している。唯、物質的な豊かさのみでなく、自由な発言を強調している。

この自由な発言のある所に真のパラダイスがあることを表現している。

以上の例によって示される如く、テオティアカンの文化は実に平和的であった。これは広い土地、然もまわりに余り強敵のいないよき時代のテオティアカンは、自らの手で收穫して富を作り出す仕方です十分生きられたから、他國を侵略する必要はなかった。

然し戦士の絵がないわけではない。それは Tepalcaxco の壁の絵である。このテオティアカン文化では珍らしい楯と槍をもった戦士の絵が描かれている。然しこれらの槍の先はとがっていないで円くなっている。これは明らかに儀式的なもので実戦的なものではなかったことを示す。概して、このテオティアカン文化は、そのモティーフに戦士や戦のシーンがみられない。即ち缺けているのがその特徴とされる。つまり後代のトゥーラやアステカのような、人間の血の犠牲はなかった。従ってマヤ文化を含めた古代メキシコ文化に共通な人間の犠牲のなかったことは特筆すべきことである。

(四) 例えば、新しい神殿の起工式等には、犠牲が供された。いけにえは通常、建物の中核の階段の下に造られた穴の中に入れられた。

これらはシタデルの中央ピラミッドのクエツアルコアトルの神殿の中で、考古学者によって発見されたことであるが、穴の中には太平洋岸から来た大きな貝、高価な緑色の軟玉で作られた人間の立像、珪石や黒曜石の短刀、それらきれいに切られた齒に軟玉の破片をはめこんだものが見つかったが、然し穴の中からは人間の骨はみつからなかった。

かくの如く、ここのテオティアカンからは人間の血の犠牲は発見出来なかった。



このようにして信仰された神の種類は前時代から知られた(1)火の神ウエウエトトル、(2)Xiuhte-Cuhchi (トルコ石の神)、これらは古い神であるが、特に大事なことは前述の壁画の如く、(3)すべてを芽ぐませる雨の神トラロック、(4)羽毛のある蛇(これは水の神であり、植物の生長力を表わす神であることは壁画から想像される所である。)又同時に壁画から (5)ジャガー(ジャガーの姿をそなえた雨の神、又この神の配偶者である水の女神もある。)(6)クエザルパタフライ(クエザルコアトル鳥、これも水との関係のある神)(7)chalehuhucue (トルコ石のスカートの婦人像、これは水の神でもあり、種まきの時の神と結びついていた。)(8)七つの蛇と蛇の神、(これらは火との関係を示す)(9)地の神、(地下と死の土地との境を形成するヒギガエルの形で描かれている。更にテオティアカンの神統記の中で一番やさしい神は、(10)小さな太った神であるが名前は忘れられているが、これは陶酔させる幸福の神であった。

以上列記したようにテオティアカンの神々は、後代のトゥーラヤアステカの神々とは、たとえ同じ名前であったとしても、その性格は極めて異なって農業的であったことは注目に値する。

然して、この神々も時と共に又文化と通商の拡大と共に、マヤ文化圏等の神や、神の性格が侵入して神の数が増大して来た。従って、それは又神官の数の増大を生み、神学校も存在するようになった。神像等の製造の為、更に複雑化した工芸や、又複雑化した宗教的儀式が芸術家や建築家、商人を生み出し、各地にその文化は拡散して行った。



そもそも、メキシコの乾燥地帯は、今から九千年位の前から水河の溶けるに従って気温が上昇し、土地の乾燥化はしまった。

然して、植物自体も自らの中に栄養分をもつものが生き残って来た。この中の一つにトーモロコシがあった。やがて、人間によって栽培植物となって改良されて行った。丁度中近東やエジプトで小麦の発見栽培によって文化が栄えたように。

この地では西紀前三千年から二千年頃に、トーモロコシの栽培によって大いに人間生存と人口の増大を助けて来た。そして遂にテオティアカンのような大人口を養いうるようになった。

従って半遊牧的な洞穴生活から村落定住生活へ移行して行った。やがて灌漑などはじまり、農業生産の余剰の蓄積貯蔵によって文化が形成された。文化とはその貯蔵によって一年の計が立てられる所に成立すると考えられるからである。行き当りの、その日暮しでは計画的な行事は出来ない。

余剰生産物が蓄積されると、余裕が出来て神殿ピラミッドの祭祀的中心を築く力が生れ、一定の地域内に人間を統御する宗教体系が確立する。従って神官王を頭とする宗教体系が確立するし、宗教的行事を行う公共の場が作られ、そこで神官王の意志は伝達され、且つ又いろいろの計画が討議されるようになる。こうなると逆に人心が統一されて

灌漑事業等も共同作業で行なわれ、飛躍的に進展する。且つ又、この神殿広場は人間接触の場ともなり、巡礼や旅人達によってもたらされた余剰物資が交換され、情報が流され都市の要素が形成されて来る。

このような遊牧民から農耕民への、そして農耕民から都市へのパターンがこの地で出来上るのは西紀前五〇〇年から後五〇〇年の期間に徐々に行なわれて行った。これが丁度テオティアカン文化の歴史年代と一致するのはけっして偶然ではない。

即ち、この地の文化の基盤はこのトーモロコシ等の農産物であり、然も数々の壁画に示されるように、この農産物の生産母体は水に外ならない。特に中央メキシコの地は乾燥の高原である為、雨の多寡がその生命を左右している。

このことは歴史的にみて、その降雨量によって定着農の北限線が常に変っていることから分る。即ち雨の多い時には定着農の農地は北へひろがり雨が少くなると南へさがる。かくてメキシコ高原の農業と雨と水との関係は雨の多い地方の我々の想像以上のものであったことが、前述の例証から読みとられるのである。従って、その神の性格も人々の真剣な雨と水への要請を如実に反映していることは他に例をみない程である。



さしも高度の文化を誇るこのテオティアカンも八世紀のはじめに破壊され大火事によって滅び去る。この火事と破壊の痕跡はテオティアカン第三期の末に作られたと思われる建築物のすべてにはっきりと見られる。

この原因は一は外国の侵攻、二は貴族や神官の支配に対する被圧迫下層民の反乱が考えられるか、供物を収めた倉庫も墓陵も掠奪され、聖像も破壊されているのみでなく、町全体が破壊されているから外敵によるものと考えの方が自然であり、又更にこの破壊自体に大きな問題を含むのである。

そもそもテオティアカン文化の最盛期をすぎる頃、北方からの好戦的野蛮人の脅威にさらされたことは、その定着農と遊牧民との争いの激化とも考えられる。恰も、漢民族と北方遊牧民とのたえまない斗いに類似している。北方の蛮族は定着民のまとまった貯蔵品を略奪すると共に、その文化にふれて影響されては、彼等自身が定着する。そしてあとから又、北方蛮族が侵入して彼等は逆に脅威を感じるに至るのは、丁度漢民族と蒙古等の問題、例せば魏の国の成立と崩壊ににている。

テオティアカン文明のあとで、第二の大きな文化を中央メキシコに作ったのはトゥーラのトルテカ族であった。然し私はテオティアカンの見学の後、この地をおとずれた時、ガラリと変った内容の建物、遺物に両文化の差、そしてその基盤の差を身にした。



テオティアカンが捨てられて百乃至二百年後、メキシコ市の北九十軒にトゥーラという町が復活し、その文化の残りをうけついだ。(地図2)

ここは広漠たる高原が展開する地帯だが、当時は北部の狩猟民と南部の両方を支配し、且つ自ら守るに適した要害の地でもあった。

彼等はよそから侵入してきたナフトル語を話す



(地図2)

蛮族の一族であったが、定着民となって新たな文化を生んだ。然し彼等は平和な種族でない。戦いの好きな遊牧民の素質を残し、神官王の政治から戦士王への政治形態に変わって行った。

即ち出土した遺品からみると、テオティアカンにみられるような平和な穀物のお供え品から人間の血の犠牲が強調されて来ることが分る。従って思想や芸術もそれが中心の主題となっている。為にトゥーラで残された伝説も、これをシンボライズするものとして興味深い。

即ちかつて、この町に、この都の建設者トビルツインという名の統治者があった。彼は羽毛ある蛇のクエザルコアトルの信仰をもって、自らそれにあやかるべく、クエザルコアトルと名のつた。そして犠牲もトルティヤといってトーモロコシのセンベイや蝶をささげて、人間の犠牲を禁じていた。彼は政治形態上、最後の神官王であって、信仰したのは雨の神トラロックであった。然して、彼は五十二年の統治の後追放される運命にあった。

それは新しい時代の流れに平和的な宗教に戦士の宗教、戦争の神がとって代り、雨や水の神はジャガーやコヨーテや、人間の心臓を食う鷲に代る。これは出土した彫刻が明かに示している。従って世は神官王から戦士の王の時代に代り、神官は唯脣を研究して農耕の時を知らせる役になり下るのである。

これを示す彫刻壁画として、

(一) トウーラの人々は三方険しい崖にかこまれた城塞を町の中心とし、ここにピラミッドの神殿を作った。即ち中心部は擬治した地の利を得た要害の地、そのまわりに住宅市街地等外縁部が作られ、テオティアカンの平地にひろがったのと異って二層の地帯からなってくる。

中央神殿は高い台地の上の十米の高さのピラミッドの上に立っている。ピラミッドは底面の四十三米四方で五つの



(写真 J)

段からなっている。

これが「暁の明星の神殿」と呼ばれるものである。

神殿は二つの部屋から出来、その一つの部屋は槍投げ器と香袋を持った四本の巨大な戦士の石像(写真J)を門柱にして屋根を支えていた。

更に次の間も、四面を盛装した戦士の彫刻で飾られた四本の石の角柱が支柱になっていた。そして到る所例えば柱廊の後ろの戦士の行列等、戦士の像が表わされて、テオティア

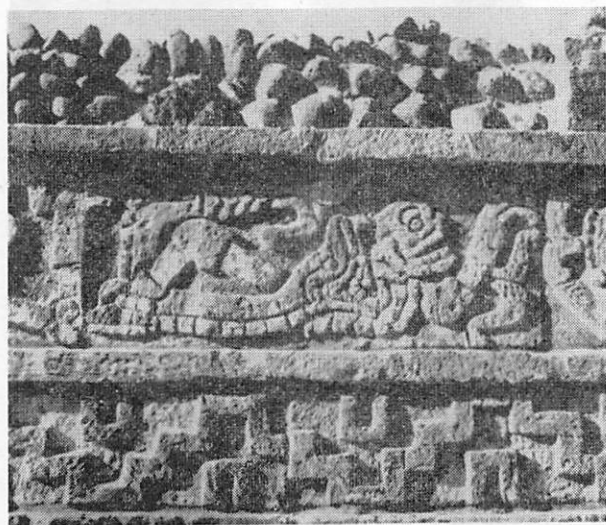
カンで支配的だった神官の像と対象的に戦士の像がそれにとって代ることが分る。このような状況ではクエザルコアトル王の追放もうなづけよう。

(二) 神殿前のチャク・モールという、あおむけに寝た神像がトゥーラの名物になっている。これは腹の上に皿をのせ顔を横にむけた彫刻である。(写真K)これは犠牲をのせる台である。又他の所にも生贄に捧げた人間の心臓をのせる神聖な「驚の器」が描がかれているし、又ツオンバントン即ち生贄の骨の置き場所の図もみつかっている。

(三) 蛇の壁といわれるものには、長さ四米の壁に三段の带状の浮彫りがほどこされ、上下二段は階段状雷紋、中段には蛇が骸骨を食べている像(写真K)が彫られている。この蛇は暁の明星の神である。明星は明け方に東にあらわれた後、目にみえない期間の後、又宵の明星として西に現れる。これは地下の世界、死の国を横断すると考えられた。即ち死の国のものを打ち破って再び出て来ると考えたから蛇が死者(骸骨)を食う図となったのである。



(写真 K)



(写真 L)

(四) Venus の Temple にジャガーやコヨーテと並んで心臓を食べる鷲の浮彫りがある。

(四) 前述の暁の明星の神殿ピラミッドは鷹、人間の心臓、ジャガー等でおおわれている。ジャガーや鷹は軍事の秩序を、特にジャガーは夜の空の戦士を。鷹はテオティアカンの雨のしずくを羽根から落す神ではなく、たくましい太陽の戦士を象徴し、又心臓は人間のいけにえからさかれ、空の神に捧げられたものを示している。

又トウラの文化を端的に表わすものとして

(四) 犠牲体の皮膚から作ったマスクで顔をおおった Xipe-Totec 神の立像がある。これは犠牲に捧げられた奴隷の皮膚をかぶって踊ると、その新しい皮を神の顔につけるように、大地が、新しいみどりの植物の皮をかぶる如く、みどりでおおわれると信じたのである。

新緑の到来をこのようなグロテスクなもので表わすところを大いに注意されていると思う。そしてその新緑の欲する度に人間の犠牲の皮膚をはいでかぶるのである。このことはテオティアカンでは想像もされなかったことである。

以上の発掘品よりみると、如何にこのトウラが残忍な考え方、好戦的な風風に充ちみちていたかが分ろう。即ちテオティアカンの人々に雨と豊かさを与える慈悲深い羽毛ある蛇、クエザルコアトル神も、人間からようしやなく血の犠牲を要求する超越的な恐ろしい神と性格が変わって行った。然らばこれらは一体何故なのであろうか。



以上みて来たことから大よそ推測されるように、このメキシコ中央高原文化の、特にそこに残された遺物の差によって、これらを生み出す基盤の相違が見出されるのではないかと思う。

即ち乾いた土地、二千米にも近い高さのメキシコ高原、そこに生活する人々が如何に収穫のために水を切望したかは

想像に難くない。写真 i のテオティアカンの水の極楽図（バラダイス）の如く、水の流れの淵に生えるトウモロコシその他、收穫を喜んで歌い且つ踊る人々、如何に水が生活の基盤になっているかが分ろう。

然も水との関係から海の貝、川の流れの模様、水滴はもとより人間の目までも水に関係づけられて彫られているし又他の雨の神から、いろいろの宝が流れ出している絵は農業と雨や水との密接な関係を示しているといえよう。従って神の性格でさえ農耕と関係して考えられるようになった。

更にテオティアカンのような広大な土地、平坦な町に、死者の大通をはさんでピラミッドやら神殿、そして段々遠ざかるにつれて庶民の家というように平面的に町並みが立ちならんでいた所で、然も何ら防衛的、軍事的の備えの見つからない現状では、テオティアカンの文化は農耕の文化の上に、更に外敵など問題にされない平和なよき時代に来たもので、為にそこに反映された文化は、この風土的社会的基盤を示しているといえよう。

然してこの平和なテオティアカン自体が外敵のために滅びてトウーラの時代になると、北方からの蛮族の侵入が一層きびしくなる。前述のように、このメキシコ高原の歴史はその降雨の多寡によって定着農の北限線が常に移動していたから、この時機が或は気象的風土的に不安定な時機にあったか、将た又、社会的に民族の移動等の時機に当面していたか、とにかく種族が常に移動していた時機といえよう。然も、この不安定な時機に、然も定住農耕民の限界線という不安定な場所（地図 2 参照）に住んだのが、このトウーラの町のトルテカ族であった。

故に好むと好まざるとに拘らず、戦術的に辺境の防備の用意はおこたることは出来ず、前哨線には狩猟民の侵入を防ぐための防塞がいくつも作られたことが発見されている。否、むしろ、このトウーラ自体がこのような山の上に作られた城塞であったことは、ここを尋ねる者にとって一番印象に残ることがらである。

これらからみると、テオティアカンの平和な文化神をうけつぐエザルコアトル王が追放されたことは、まさに戦国乱世という社会状態ではとうてい、その平和な信仰が生きることの出来る環境ではなくなったことが考えられよう。

更にかかるきびしい状況の下では武力と斗争の精神がなければトルテカ人の社会は滅亡する。従って、その軍事的性格が宗教的表象にまで強く現れ、そして神々の性格までも変えて行ったのである。

以上のことから、そのよって立つ基盤の変化によって、そこに発生する思想文化は当然変化をうけて来たことが分る。

即ち思想はその成立する時、そのよって立つ自然的な環境と、その自然的な環境の上に形成された社会的基盤を無視出来ないことが分る。

文化はいはば、自然及びその上に立つ社会の自己自覚、自己反映といえよう。即ち夫々の自然・社会がその中に生活する人間を通じて、自らを自覚限定したものが思想文化であるといえる。

かくて、このテオティアカンからトーラへの文化の移行と変化が、私の思想とその基盤の問題を考える上に、非常に有意義なるものとして、私のメキシコの旅を思い出深いものとしたのである。